

少子化問題を解決する中医学

吉富復陽堂医院 院長 吉富 誠

「Think Globally Act Locally」1970年代の地球環境運動のスローガンです。「地球規模的思考，地域的活動」と訳されています。少子化問題を考えるとき，この言葉を思いおこします。地球規模で考えると，これ以上地球に人類が増えることは必ずしも望ましいことではありません。しかし地域的規模で考えると，急激な少子化という変化は好ましいことではないと考えます。もちろん少子化対策のために子供を産み育てるといってもありません。臨床医としてはGloballyな視点を持ちながらも，Locallyに患者さんの悩みに向かい合うという立場で考えたいと思います。

東アジア伝統医学では，人間の生を肯定し，子孫にその生を引き継ぐことを重視してきました。『黄帝内経』ではご存じのとおり，「上古天真論」で男女の生殖機能の推移を8の倍数と7の倍数で説明しています。『神農本草経』には「川芎が婦人の血閉無子を主る」などの記載があります。『金匱要略』では婦人雑病脈証並治に「温経湯は婦人の小腹の寒久しくして胎を受けざるを主る」とあります。唐代の『諸病源候論』は妊娠から出産・産後の諸症状，不妊症について，さらに男性不妊の病因についても記載があり，以降の書に多く引用されています。『千金要方』では婦人方・少小嬰孺が巻首に配置され，序文に「先婦人小兒而后丈夫……」と婦人・小児を重視しています。宋代には『婦人大全良方』が著され，宋以前の産婦人科学を集大成し，後世に大きな影響を及ぼしました。銭乙は『小兒薬証直訣』で，小児の特徴を「臟腑柔弱・易虚易実・易寒易熱」と表現し，小児科学の基礎を築きました。明代の『景岳全書』でも婦人・小児の疾患が多く取り上げられています。『保嬰撮要』では母を兼治することを推奨しています。韓国医学の原典である『東医宝鑑』でも婦人・小児に多くの頁を費やしています。本邦においても『医心方』では婦人諸病篇・胎教篇・産科治療・儀礼篇・小児篇・房内篇で唐代までの産婦人科小児科の集大成がなされています。『啓迪集』では婦人門・小児門で明代までの集大成を行いました。江戸時代の香月牛山による，『婦人寿草』では求嗣・産前・産後の養生をわかりやすく説いています。このように妊娠から育児までは古代より医療の重要な分野の一つであり続けました。

現代中医学はそれまでの学説を引き継ぎながら，現代医学的な視点も取り入れて不妊から子育てまでの治療を行っています。韓医学においても儒教の国である

ことから益々切実な問題として取り組んでいます。いわゆる日本漢方においても不妊症に対してすばらしい治療成績を誇る発表もあります。

高度生殖医療や周産期管理，新生児医療が進んだ現在でも，西洋医学が苦手とする分野が残されています。中医学的アプローチが有効な例は皆様が経験されているとおりで。今回のシンポジウムでは，それぞれの専門分野の第一線で活躍中のシンポジストから実践的なお話が聴けると存じます。今回の学会で，少子化問題に中医学が貢献できることを再認識し，広く臨床に応用していくことを期待しています。